

浄土

九月号

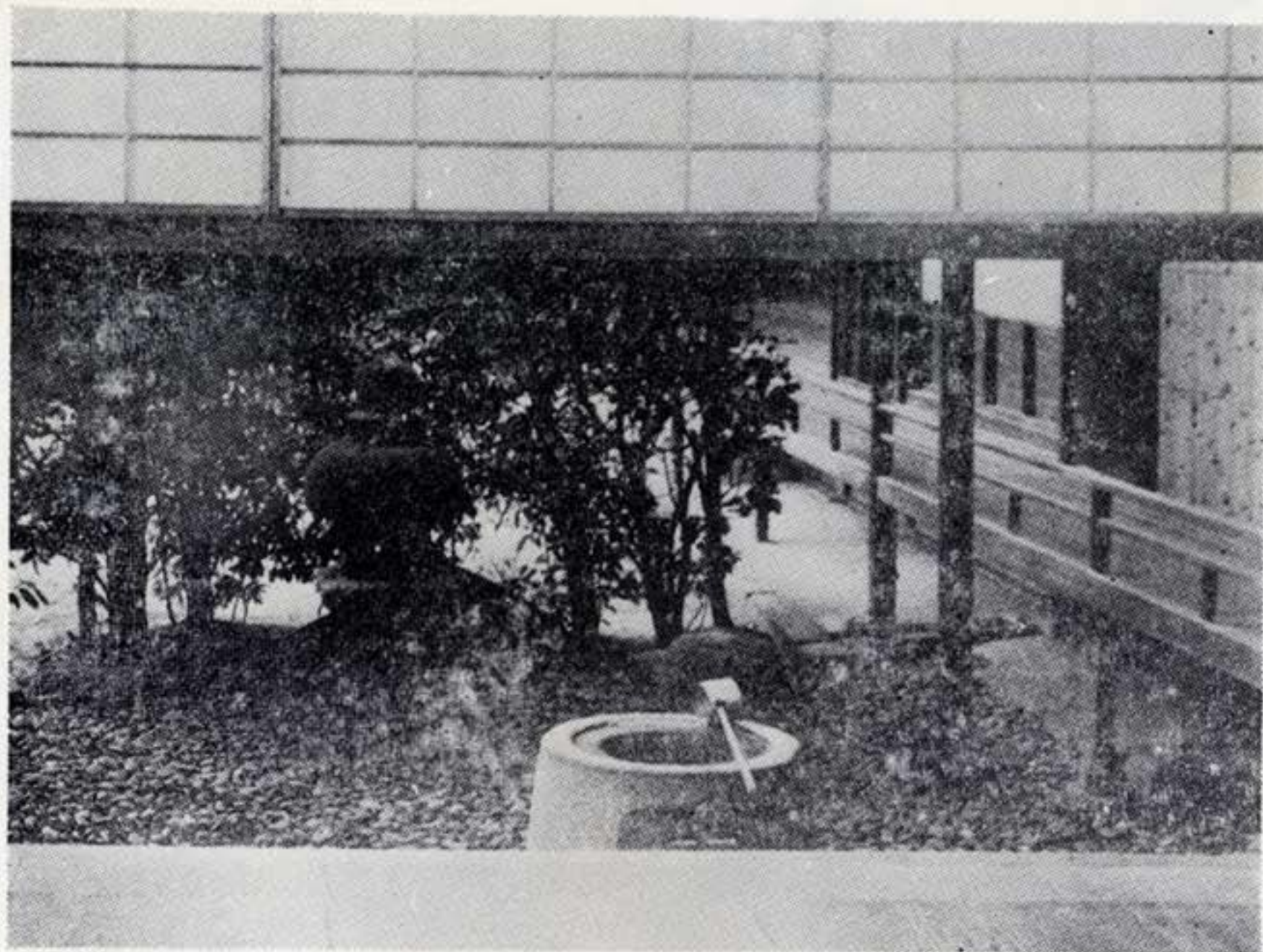


法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可、(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和四十五年八月二十五日印刷 昭和四十五年九月一日発行

第三十六卷

第九号



目次

表紙「桔 梗」松涛達文画

さやかにみゆる月の面影—彼岸におもう—	宮 林 昭 彦	(2)
インドでの旅日記②	佐 藤 治 子	(6)
念仏生活シリーズ② 真実のみ教え	山 口 諦 存	(12)
聖典解説⑧ 往生礼讃より発願文	戸 松 啓 真	(16)
祐天上人安産の名号		(19)
母	平 井 宥 慶	(20)
和来ばなし くもの忘れ・八遍念仏・真言のふしぎ		(24)
読者のたより 悲しみをのりこえて	須 山 俊 夫	(26)
道⑤鳥羽への道	高 橋 良 和	(29)
宝物シリーズ⑨ 相模大山不動尊		(32)



今月のことば

戦後二十五年を迎えました。一切を戦災に遇い失って、残された防空壕に半年の地下生活を通した経験のある私には、特に感無量なものがあります。原爆をうけた方々には更に更に言葉に絶したものがあつたことは、今更いう迄ありません。

ものみなうつり変るという釈尊のおことばをまのあたりにみる感です。国土は復興され、産業ははてしない程伸びに伸びております。物質的には輝やかしい未来が約束されているといつてもいいでしょう。第一次の産業革命以来、物質文明の謳歌と共に精神文明の崩壊がさげばれてきました。技術革新による第二産業革命の時代といわれる現代、一層の精神文化の衰退が眼立つようになつてきました。自然は破壊され、伝統は無視され、人間は疎外されつつあります。

しかし、わたくしは信じます。日本の産業は伸びるでしょう。それと共に必ず人間は復活し、伝統が重ぜられる時が来ることを。すでにここある学者、先覚者によつて、そのことは説かれ、ある者は実践し、あるものは思索しつつあります。

異常な迄に世界はせまりつつあります。世界は一つになるといつては過言でありましょうが、少くとも過去におけるよりも、交流は広くなつております。万国博の様相をみてもわかります。核による世界の滅亡を説く人もありますが、人類のエイ智は必ずこれを救うものと信じます。世界をあげて、文化をたたえる時代を私は信じます。「浄仏国土(みほとけのくにを浄め)成就衆生(いきとし生けるものが、その生を完うする)」の仏教の理想が着々と実現することを信じます。

二十五年の歳月は短くもあり、長くもあります。この人間の努力を信じたい。現前にこれがある。先般、愛知県の大樹寺を訪れ、徳川家康の標語「厭離穢土、欣求浄土」の文字をみてきました。今日に生きる、真実のことばであります。

(佐藤良智)



さやかにみゆる月の影

—彼岸におもう—

宮 林 昭 彦

「生死を此の岸となし、涅槃を彼の岸となし、煩惱を中流となす。菩薩は無想の智慧をもって禪定の船に乗り、生死の此の岸より涅槃の彼の岸に到る」

彼岸のことを経典には、かように説かれています。わたしたちの生き死にしている世界が此の岸であり、かの極楽涅槃界が、彼岸ということでありましょう。してみると、極楽のことが彼岸であるならば、こと更に彼岸などといわなくても、極楽といえはそれでよいではないかということにもなりますが、実は、ここが大切なことであります。極楽を彼岸といえは、聞く人の心に響きかたがちがってきます。彼の岸といえは、すぐに此の岸が考えられるようになります。このこと、かしこに隔りのあることが感じられる。この隔りのあることを知らしめようと、とくに、単に極楽といわずに、彼の岸といったのであります。

しかれば、此の岸と、彼の岸との中間に、どんな隔りがあるかというところ、煩惱という大きな流れの河があるということです。このへだたりのあることを、「阿弥陀経」には、娑婆と極楽との間には、十万億土のへだたりがある、と説いています。この大きな煩惱の流れの河は、自分よりほかのところにあるのではなく、実は、お互自身の心のなかに、すでにもち合せているのであるということです。この



お互がもち合せている煩惱の流れの河は、なかなか容易のことで渡り切れるものではない。常に自分と同居しているのである。同居しているところではない。すっかり煩惱の河中におぼれこんでしまっているのです。このことを、善導大師は「自身は現にこれ煩惱具足の凡夫」といわれています。

二

此の岸と彼の岸ということは、理解しやすいとしても、この中間にへだたりをしている煩惱の河中に、お互がおぼれこんでいるということが、なかなか実感としてうけとめにくいものであります。なるほどとわかってみると、その河中の渡り方におもいをめぐらすのでしようが、その実、この煩惱の河中が、恋しくて、なかなか離れかねているのが、わたしたち凡俗の人間のすがたではないでしようか。

お互が煩惱という河中に愛著をもっているから、この煩惱がその種となって、いろいろの罪をつくる。煩惱を具足しているだけでなく、実は罪惡の凡夫であるということが、次第にわかってきます。これを、浄土教では、信機といって、わが身のほどを知るといふことであります。わが身のほどを知らんとするならば、まず自分は、どれくらいの心のもち主であるかを考えてみるとわかります。

おりあらば忍びいでては悪戯を
なすもののすむ胸にてぞある

煩惱妄念貪欲我愛の念がうずまいて、わたしの心がのぞかれてきます。
わればかり罪深き身はあらじとは

思いながらもこりもせぬわれ

といわれますように、まったくみにくい心のわたしたちのすがたであります。

一体、煩惱々々といわれますが、煩惱というものの性質は、本来なんであろうかといえますと、仏



教では、随眠といわれています。わたしたちの体内の中に、随って静かに、眠っているものだというのです。随って眠っているのなら、起きてこないかというところ、わがまま我欲の根性から、目でみたり、耳で聞いたりすると、すぐに起きあがって活動をはじめます。知識や理性でいくらおさえなくても、眠っていないというのです。平生は、まことに静かであって、ちょうど猫の眠っているようなものであるが、ちょっとでも音がしたり、においがすると、すぐに起きあがってくる。表面は眠っているようにみえても、その内実は猫以上で、毒蛇でもすんでいるような、まことにおそろしいものであると、お釈迦さまはおしえられており、煩惱のことを、「結」であるといつて、五結とか、二十一結などのことが阿含經におおく説かれています。

すなわち、わたしたちの心の根に結びついていて、どうしても離れかねるものであるということですから。いずれにしても、お互の心のなかに、煩惱がすみついていいることは事実であります。遺教經には「煩惱毒睡はなんじの心にあり」といしましめられています。

三

かように、自分自身を反省してまいりますと、いかにしてこの煩惱と苦悩のにこりから離れて、清浄な、明るい世界に向って進もうかという心がおきてまいります。

いま、この煩惱の流れからのがれるために、自分自身の努力によるか、あるいは、努力もするが、むしろ他の力にすがって、流れをこえてゆくか、そこに、仏教における、自力と他力のわかれ目があります。

しかし、この煩惱の流れがほかに存在するのであるならばともかくとして、この煩惱は、自分のからだのなかに、すでにもち合せているのですから、ここに問題があります。



浄土門のおしえでは、お互に肉欲我欲の煩惱のなかにうずもれきっている此の岸から、煩惱の穢れのない、常住の涅槃の彼岸に到るには、称名念仏によって、あみださまのお慈悲にいだかれて、み仏さまのお救いの力にすがることをおしえられたのが、浄土門の信法ということでもあります。あみださまは、かならず、わたしたちの煩惱から脱却する力、すなわち、わたしたちの苦悩のそのままです。おすくいくださると信ずるのであります。

心を一にしてお念仏して、彼岸の極楽浄土をねがい、あみだ仏に親しみ、あみださまのお慈悲にすくわれることが、此の岸と彼岸とのへだたりをとりぞくことであり、またわたしたちの苦悩と煩悶からまぬがれることでもあります。

おもえば、み仏と凡夫との中間には、煩惱と罪惡というへだたりのある以上は、なかなかみ仏にちかづくことはできません。一個人でいうならばみ仏と凡夫ではあるけれども、もっと広く人間社会でみるならば、此の岸と彼岸ということになります。この兩岸のへだたりは、やはり煩惱と罪惡の流れであるから、この流れをこえなければ、彼此一体となって、さとり境界に到ることはできません。

み名をよぶ声に心の雲はれて

さやかにみゆる月の面影

口に、「なむあみだぶつ」と唱えれば、あみださまは、わたしたちを光のなかにすくいたまひ、影の形にしたがうがごとく、念仏行者のまえに現前したまひ、たとえ煩惱妄念の流れは深くとも、不断煩惱得涅槃、なんのへだたりもなく、あみださまのお慈悲にいだかれて、けがれのおおい此の岸から、清浄無垢の彼岸に、すくいとり給うのが、あみださまのご本願であります。

すべての断絶やへだたりをこえて、み仏さまと凡夫が光明世界に悟入されるのであります。



ブツダガヤの金剛宝座

カルカッタ空港

十五日、四時起床。部屋へ紅茶とビスケットを持って来てくれる。五時半出発。カルカッタへ着いた時は真夜中だったので、空港はどの方向にあるのか見当もつかない。

空港は出発する人達や見送りの人達で混雑している。やせて見すばらしい服装の人達もいれば、サリーの美しい婦人達もいる。六時十五分出発のはずがおくれている。アナウンス

佐藤 治子

第二回

インドでの旅日記

は英語である。十七州に分れているインドは、各地にその地方の言葉はあるらしいけど、英語は一般語として通用している。

日本の若い人達の一団にあった。大きな荷物が沢山積んであったが、その人達の物らしい。ベンチにかけていた私にリーダーらしい方が近づいて来られ、私達のグループはどこへ行かれるか、そしてどういうグループかと聞かれた。私は目的とグループの事を話した。その方はおどろかれ、「私は東海中学校で椎尾先生に教わりました。今は名古屋大学にいま

す云々」となつかしげである。その一団は日本山岳会東海支部のメンバーで、ヒマラヤ登山隊で、その先生は麓まで送って行かれる由。飛行機が先に出発するか分らなかったけれど、いよいよ搭乗するアナウンスがあった時、私達は「フリーフレ、行っていられっしやい」と激励してあげた。私はハンドブックに入れておいた大仏様の小さい銀のメダルを、登山のリーダーとなる一人の青年に「御成功を祈っています」と、その人の手ににぎらせ、「もっていられして下さい」とあげた。(その後どうなされたか案じていたが、登山成功のニュースを九州にいるときいて、一人でこどりして成功を祝ったのであった)インド航空のプロペラ機に搭乗。手をふってその若い方々と別れ、ガヤへ向った。

ブツダガヤへ

広い平野の上空を飛ぶ。ステュワデスはサリーを着ている。長い裾をたくみにさばいて、細い通路を忙しそうに歩いている。よくひっかけもしないでと、サリー姿の婦人の美しさにみとれる。日本の銘仙といったような布地。もしかすると日本製かも知れないと思わせるような柄である。一時間も

したかと思われる頃、下降しはじめたようだ。

アッ、ストゥーバだ！あのブツダガヤの大塔だ！広い青々とした平原にそびえ立つストゥーバは実に印象的。左手にストゥーバを遙拝していたが、グワーと飛行機は大きく廻りいよいよ着陸。まるで眠ってでもいるような静かな飛行場に降り立つ。三四人の人達が立って待っている中に野呂さんが手をふって迎えて下さる。元軍用であったというこの飛行場にたった一機がいるだけである。淋しいというものでなく、のんびりしている感じである。日ざしは暑い。けれど一寸影に入るとさわやかである。

用意して下さった三台の自動車に分乗。荷物は車の屋根の上へのせる。運転手は右手で屋根の荷物がしっかり結んでいいのか、ひもを押えている。左手で運転。どうもあぶなっかしい。一寸車をとめてなおせばよいのに。続いて走る車に合図する方法はないものかしら。

日本の田園風景と同じような景色の中の一本道をデコボコとゆられ、片手運転をしている運転手にハラハラしているうちに国際仏教日本会館へついた。丁度九時。会館の前の広場にテントがはられ、国旗が風になびいている。挨拶もそこそこに着替えにかかる。先着の浄土宗の方達がなつかしいお顔

をだして来て下さる。

法

要

法服に着がえられた僧侶方が玄関前に勢揃いされる。どの
お顔も汗ばんでいられる様子はない。侶の式服に着かえた私



記念撮影



ガヤの大塔を遠くに式場へ



金剛宝座へ参詣

も肌がサラリとして気持ちいい。導師はシンさんが持つ赤い傘の下で涼しげである。とても二月十五日とは思えない。立ってみている土地の人達や、うすぎたない子供達の黒い顔、手足のせいか、お坊さん方のまっ白な足袋におそろいのぞうりの足もとが実にきれいで、すがすがしい。東京より参加された玉山夫人と私は別のテントの中の椅子にかける。私達の右

手にはセイロンやチベットの僧侶方が着席される。

読経が始まる。フツと寺庭婦人会の皆さんの事が思い浮んでくる。ここへ来ることを知っていられる理事の方々も、それぞれ日本でねはん会をつとめているだろう。そして「今の私は遙かインドのおさとの地ブッダガヤで合掌しています。皆様の分も心一杯にして……」私は小声で読経していたけれど声がとぎれる。涙が目じりから溢れ流れる。この有難さ！ 思いがけなかった聖地での今の私の所在に、只々深々と頭を下げて仏縁を感謝するだけで、感激を表わす言葉もみつからない。さわやかな風によって読経が流れていく。

浄土宗の法要がすむと、参列のセイロンのお坊さん方が立ち上り、設けられた仏壇の前へ進み、かこむように立って読経。続いてチベットのお坊さん方がお経をあげる。

その後、会の理事さんがスピーカーの前へ立ち、ガンディ首相のメッセージを英文のまま代読。佐藤首相よりのメッセージもよみ上げられ式を終る。式後食堂へ入る。大役を果たした僧侶方のお顔もくつろいでみられる。

食堂も仲々広い。よくここまで大事業を果されたものだ。この田園の中にこの建物を建てられ、材料、工事人の事情もむづかしかったであろうにと、巖谷理事長さん達の、今まで

の苦勞に現地で初めて認識を深める。

向うのテーブルにチベットやセイロンのお坊さん方が、もうおひるもすみお茶をのんでいられる。お釈迦様の御教えの中に、十二時以後は食事をしないという戒律がある。それでさっさと御食事を済まされたのだな、などと思いながらふっとお茶わんが日本製なのに気がつく。

あとであの湯のみが浄土宗寺庭婦人会から寄附したものであったと分り嬉しかった。送る方法がむづかしかったので祐天寺様におまかせしたきり、どういう風に送られるか分らなかっただけに、あまり早く現地で使用されているのを見て、同じような湯のみを寄附した方もあったのだなと思っていただけに、あまりに早く婦人会員方の御寄附が重宝されているのを、あとで知らされ私の喜びは大きいものであった。

尼 蓮 禪 河 から 大 塔 へ

車に分乗し尼蓮禪河へ向う。かつては水が満々としていたといわれる、この川も目の届く限り砂ばかり。川の遙か向うに正覚山が見える。あのよく拝見する「出山の釈迦」と題する絵を思い浮べる。正覚山に連なる苦業林に六年も修業され、



＜一步一步尼蓮禪河の砂川をふみしめて＞

おさとりの境地に達せられずして、骨と皮にやせ細られて山を下られた、あの御姿は、今向うに見える正覚山から下山されたのだ。

河畔の大樹の並木の涼しげな所には牛が沢山いる。暫く砂の川に立っていた私達は、用意し

てきた小さい袋に、発熱でいらっしやれなくなった阿川先生にさし上げようと、一人々々少しづつ砂をすくって入れる。

私達もここまで来ることができた記念にと、めいめい少しづつ砂を小袋に入れたりしている時、子供達の足音が近づいてきた。菩提樹の実を糸でつなぎ合わせたものを売りつけよう

とするのだ。この静かな砂の河畔に、感慨にふける間もない、しつこく私達一人々々にまつわりついてくる。私はすつとはなれようと、知らん顔をして歩き出した。二三人追って来て、向きを変えたとすばやくすりぬけ目の前に日本語で、菩提樹々々とお珠数をひけらかす。立止ると買ってくれるかと思って、なおもすすめる。私達は大樹のかげに待たせておいた車へ足早に戻って乗ってしまった。

同じ道で大塔拝観に引き返えす。他のグループと交替に拝観するため、こういう手段をとったらしい。ブーゲンビリアが咲きみだれている。石段で靴をぬぐ。日ざしでぬくもっている敷石はあつい。石だたみを歩き、鉄棚をめぐらした金剛宝座へ近々と拝むため、私達を鍵を開け中へ入れてくれた。お釈迦様がこの石の上に座られおさとりを得られた、その場所には皆拝礼、只々感激の頭を深々と下げている。菩提樹も何代目になるのであろうか。現在のも大樹となり茂い繁っている。しゃごんで宝座をそつとなでる手もつつましか。歩を移す足許も自づと指先にまで力がこもり、全身に神経の緊張を覚える。ふとまわりをみると、土地の人達だろうか、鉄棚にもたれボカンとした顔つきで私達をみている。

再び鉄棚の小門に錠をおろす番人をあとに大塔一周に歩き

出した。反対側から下をみると、五体投地をするための板が
おいてある。あいにく五体投地の人がいなかったのは残念で
あった。回廊の一隅に座り経文をとこなえている人達のそばを
静かに通る。一人で座っている人もいる。祈っているのかと
思ったら、手をさし出した。ものをめぐんでくれという事ら
しい。

大塔拝観の後、花壇のそばの石にこしかけて暫く一休みす
る。ほてった頬にふく微風は心地よい。再び靴をはき車へ戻
る。大塔の前の道路は露天の商人が首飾りやお珠数を参拝者
にすすめている。

その夜は日本人ばかりの夕食会。お赤飯が出た。思わず
「おいしそう！」と歓声をあげると、何ですか、日本から来
て未だ三、四日しかたっていないのに、もう日本食をなつか
しむなんて、我々はあちこち廻って来て、久々の日本食です
ぞ」と、からかわれてしまった。本当にそうだった。インス
タントのおみそ汁など、皆持っていた人達のは少し足りない
からと挑発をされたとはいえ、こうして山盛のお赤飯や日本
式のおでん風の煮物等を目の前に見、周りの人は全部日本の
人達、ホームシックならぬ特別な感慨にふけらざるを得な
い。御法要が済み、ガヤの大塔を参拝し、正覚山をのぞむ尼

蓮禪河のほとりに立った感激に、もう何週間も日本食を食べ
てないムードになってしまっていたのだ。

一人の若い尼僧さんがくるくると土地の人達にまじり、広
い台所で働らいていられた姿は実に生き生きとして心に残っ
た。ノート片手に言葉を習いながら奉仕される姿は尊かつ
た。「二年近くここにおります」と、かいがいしく話されて
いたが、私達が次々と去ってしまった後はどんなに淋しかろ
う。周囲にいる者は皆インド人の下男下女達、近くにセイロ
ンやビルマの僧院が立派に建っているとはいえ、大勢人がい
るとも見えない。よほどの決意がなくてははいられない。あの
涼しげなまなざし、くるくると働かれていられた御姿が浮ん
でくる。

昼間、玄関前の広場に幾組もゴザをひいてお珠数を並べ
て、しつこく売りつけようとしていたインド人の土地の商人
や子供の家はどの辺にあるのだろうか。ひっそりとして、只
闇の世界である。十五日の法要のため合流した浄土宗の方々
とは、ここでお会いしたあとは、暫くお別れなのだ。どこか
らか明るい笑い声が洩れてくる。ベットには床に届くばかり
に裾の長いカヤがつつてある。これがあればヤモリの心配も
ない。翌日は四時半出発ベットにもぐりこむ。



真実のみ教え

山口 諦 存

(浄土宗教化部長)

関西地方の盆行事は八月であります。長い伝統をもつ仏教行事の中で、盆の行事ほど心のふるさとをしみじみと思う機会はないと思います。国鉄のダイヤも帰省列車が組まれ、京都や大阪駅前には大テントの臨時待合所が設備されます。折からの炎暑と混雑の中を、家族を連れて帰省せられる人々は、ご先祖への再会と、静かに心のふるさとへ帰える、楽しさと喜びに満たされ、ご先祖のお蔭によって今日のあることを感謝し、墓前に香華を手向け、墓碑にいくたびも水をそそいで、合掌念仏して親兄弟はもとよりご先祖との対話のなかに、力強い心のささえを得られることと思うのであります。

魂まつりとよばれる、お盆の行事は、ただご先祖や亡くなられた人々を現に今、在すようにご供養するだけではなく、

もし幸に父母がいられますならば、孝養の誠をつくす行事でもあります。今は断絶の時代といわれる悲しい事態が、罷り通っています。

お盆に相集うた、親子、兄弟、親族が同じ血の通いあっている者の、親しさをしみじみと味わい、骨肉の情をあたため、はぐくみ、ともに力をわかち、助け合ってゆく、人間性の回復に役立たせたいものであります。

今は亡くなった人々も、現に生きいる人々も、ともに救われてゆくことが、お盆の現代的意義ではないのでしうか。うらぼん経の中に「父母の寿命百年。七世の父母は喜処に生れ福楽極まりなし」などと説かれていますことは、風習的な魂まつりであってはならないと思います。

このごろは、昭和元禄といわれます泰平な時代ではありませんが、しかし、経済の高度成長の蔭からしのびよってきた、公害問題に悩まされ、空気は汚染して、生ることにすらおびやかされています「三界は安きことなし」との仏のおことはやはり真実であります。真実の教えがなぜ信ぜられないのでしょうか。

社会生活の不安と信仰のない人々を追う、精神的な公害はいわゆる迷信であります。最近流行の「印相学」もその一つでありましょう。ここで「印相学を斬る」というような、考へは毛頭ありませんが、署名捺印することは、署名に責任をもつ証拠であります。西洋流のサインでも十分事足るのであります。印鑑を捺すところに東洋風のよさがあります。法然上人がご臨末の遺訓として、お残しになりました一枚起請文の末尾には「証のために両手印を以てす」とありますが、両手印は印鑑であります、浄土宗のみ教えの至極である千古不磨の大文字は、両手印によって微動だにせず、今日に至るまで念仏信仰の根底となっています。

手印や花押に代わる現在の印鑑が一般化された歴史は、まだ新らしいものでありましょう。しかし、印相学は「凶相印

・改名以上の開運印章・吉相印には入魂式を」など、用材・形状・字体にいたるまで微細に規定しています。又、凶相印の事例として、角印、文字が輪廓よりはなれた印、一生志望を達することができない、企画をたてても失敗し、目的方針が定まらない、家庭不和で悩みが多い、災害、困苦、剣難の大凶印と説明していますが、わたくしの印鑑は正しくこの大凶印に当るのです。しかし、この説明は全く当たっていません。国印・天皇印も角印であります。一体どこに吉凶の理論的な根拠があるのでしょう。又、吉凶そのことをどのように定義づけようとするのでしょうか。念仏するものには、日々これ好日であります。

いつかのことであります。主人がこのたび改名しましたので、旧名の実印は祖先の墓地へ納めなければなりませんので、納印に來た人がありました。間もなく主人は死亡せられました。開運の改名、改印であったはずでしたが、納印は納骨の前兆であったのです。さて、どこに吉相があったのでしょうか。ご主人の死を機縁として、み仏の真実の教に帰入の誘いを働きかけてはいますが、念仏する人にはなれないのです。最近改名の通知に接しました。

笑うべし迷信ではなく、憐むべし迷信であります。

うら盆の行事も心して営み、正しい意義を忘れないようにしたいと思います。

最近、仏教書は書店に氾濫して、ブームの感さえ呈していますが、仏教の信仰とは別であります。強いていいますならば、仏教への関心度が高まっているに過ぎません。

さて。江戸末期、今の和歌山県から念仏行者として有名な徳本上人が出られました。文政元年（一八一八）十月六日、江戸小石川一行院において六十一歳の入寂でありましたから、布教伝道は三十年余りではありましたが、その教化は百五十年を経た今日、なお生きた信仰として各地に残っています。

明石、光明寺には約、一丈もある名号石が本堂前に建っています。文化七年（一八一〇）三月十九日から二十五日まで七日間、法然上人六百回忌が一年早く営まれ徳本行者の説法がありました。滞在中、明石川下流や赤石付近に漁夫の遭難することを聞かれ、舟を出させてこれらの難所へ赴かれ、懇ろにご回向があり、赤石には名号紙を散布して、錫杖を手にして強く突き海難のないよう、お十念を授けられました。以

来、さしも恐れられていた赤石付近の遭難は、絶えてなくなりました。

浜の漁業者は、今も毎月上人のご命日六日の夜、漁業会館の二階に上人のお名号軸を奉安して別時念仏を行い、翌七日には光明寺の名号石に参詣して香華を手向け、一同が上人への報恩念仏を称えています。

父祖伝承して徳本上人の勧められました、念仏信仰は現に今日、漁夫の生活に生き、力となっています。念仏信仰が真実の教えとして、生きている証拠であります。舟底一枚下は地獄の海に生きる、たくましい人々の心を支え続けていることは、実に尊いことでもあります。去る七月の末、富山県魚津市に赴き、はからずも、上人の名号石が海岸から遠く富山湾に向って建っている所へ案内せられ、拝礼称名の仏縁に恵まれました。魚津も明石も共に漁港であります。漁港と念仏のただならぬ縁が強く印象づけられました。

酷暑の富山湾を眺めながら、ふと思い浮びましたことは、須磨の海岸でありました。

秋風や平家弔ふ経の声　―子規―

八月も終り近く九月の声を聞く頃となりますと、もう朝夕

は涼氣も加わり、虫のすだく音も既に秋であります。

須磨は源平の古戦場であり、今も源平の哀話が語りつがれています。

法然上人が流罪の身となられ、遠く讃岐へ赴かれました旅の途上、弟子勢観房源智が馬の口をとり、馬上の法然上人がここ須磨の戦跡を弔うために通過せられるところを画く「伝法絵」の、珍しい法然上人の伝記絵を見ますと、平家の若武者敦盛の最後をいたむ供養塔敦盛塚の辺りは、法然上人が親しく菩提を弔われたことであろうか、又、山陽電鉄須磨寺駅北にある「平重衡とらわれの遺跡」の石しるべの付近にも佇まれ、奈良大仏殿を炎上させ、仏法の怨敵とののしられて、都大路に生き恥をさらしながらも、遂に法然上人の慈顔にまみえて、念仏の法門を聞き称名の内に処刑せられたあわれな末路に、涙したもうたであろうかと思うと、上人遠流の足跡であるこの古戦場一帯を、新涼と共に歩きつづけ、上人の昔も今も浦辺の波の音は同じであり、八百年を経ても念仏の声によって、上人に直参することのできる真実のみ教えを、しみじみと味わいたいと思うのであります。

新刊紹介

大正大学助教授 玉山成元著

普光観智国師

— 近世初期における浄土宗の発展 —

△A5判二三〇頁上製 定価一八〇〇円▽

中世の浄土宗は、教義的にも教团的にも統一された宗団としては確立していなかった。これを何とか正統化しようという現われが室町時代の学問的風潮となり、聖岡が出て教義の大成をはかったが、各地に本末團が散在し、教団としての組織は不統一であった。その本末團を統制し、名実共に他宗と匹敵する浄土宗教団を作り上げ、今日ある浄土宗を基礎づけたのは観音国師（源誓存心）である。著者は良質の史料を駆使して近世初期の浄土宗史を深り下げ、その流れの中で国師の生涯を浮きぼりしている。とくに表面的な履歴の羅列にあきたらず、人間的な性格の把握に心血をそそいだユニークな著作。近世仏教における実証的研究の先駆をなす必備の書。

発行所 白 帝 社

電話二六一—四三五六番

東京都千代田区神田神保町三の十三

戸松啓真

(大正大学教授)

善導大師『往生礼讃』より

発願文

願くは弟子等、命終の時にのぞんで心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心にもろもろの苦痛なく、身心快楽にして、禪定に入るがごとく、聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえかの国にいたりおわつて、六神通をえて、十方界にかえりて、苦の衆生を救摂せん。虚空法界も尽きんや、我が願もまたかくの如くならんと発願しおわんぬ。至心に阿弥陀仏に帰命し奉る。

常に臨終の思いを

この文は前回の「日歿無常の偈」のすぐ次に続くものである。善導大師は日歿無常偈において、あわただしい日常の生活におわれて、いのちが日夜去ってゆくのを覚らない人びとに、いのちの無常性といのちが無常なるがゆえに、ただ日常生活のつとめだけでなく、身体の丈夫な時にこそ永遠なる世界への信仰を持つべきことをすすめたのである。信仰のない人生は、ちょうど根のない植木のようなものである。その花はわずかの間、あざやかに見えるがたちまちに萎んでしまうのである。人生の花を花たらしめるには根がなければならぬ。根とは信仰であると善導大師はいわれた。

今朝親類のD氏宅から電話があり、D氏が自宅の近くのゴルフ練習場で突然たおれ、よくわからないが脳溢血らしいという。一週間前にD氏の子供と私の子供をD氏の運転する自動車で房州へ海水浴へつれていっていただいたばかりで、三日前に帰京し、本日再び行く予定でD氏の娘さんが耳を診察してもらってから出発するとのことで自宅返くの病院へ行き、順番を待っている間に氏は病院前のゴルフ練習場でゴルフをやったまもなくたおれたとのことである。D氏は体も大きく丈夫でふだんはゴルフも上手で血圧も高くなく、数日前

には海水浴に行きすっかり日焼けして、健康そのもののようであった。意識不明のまま救急車で運ばれた病院には、それと知らずに娘さんが順番を待っていたのである。私が病院へ行った時は眼底の検査をしていたところで、脳の血管は大丈夫らしいが、病院へ来てから何回か吐血をしたので、あるいは胃に異状があるかも知れないとのことであった。病室の寝台で苦しそうにしているので、重態の様子であった。D氏は四十八歳で私より若くいわば男盛りである。人の健康もわからないものである。それにつけても私の五十年をふりかえってみると、よくも無事生きてきたと思う。誰もそう思うにちがいない。幼年時代、学生時代、中国満州ソ連を転々とした軍隊時代、生活の仕事に精を出した時代と長いようで短い五十年であった。あとどの位のいのちかわからないが、七十まではなんとかと思う。とすると「私の生」は二十年である。これまで生きてきた五十年は「私の死」である。一日生きたのは一日死んだのである。善導大師は前回の無常偈で、「年命の日夜に去ることを覺らず」といわれ、それゆえに人は強健有力の時に常住を求めよと説かれたのである。そして善導大師がこの偈文を説きおわって、具体的な願いとして次の二つの願をおこすべしといわれたのがこの願文である。

往相願と還相願

この発願文は六時礼讃のうち日歿礼讃に出ていて唱えられるものであるが、昔から日常勤行の時に念仏一会の前に音読または訓読されたのである。とくに「素衆平生勤行式」といって在家者の日々のおつとめには、必ず読むべきもので、その順序をあげると、

三拝、発願文、摂益文、念仏、回向文、三拝

となっている。また臨終の覚悟がねがいとしてのべられているので、御通夜や葬儀のさいに亡き人に回向される。そして善導大師はこの発願文の前に「心口に発願すべし」と書かれているから、ただ口で唱えるだけでなく、心にも念ずべきである。

この偈の特色は、人間の願いとし往相即ち臨終に安楽な往生を迎えたいという願いだけでなく、還相即ち往生をとげた後も神通力をえて、この苦の娑婆世界の人びとを救いたいという願いをのべていることである。浄土宗の第三祖良忠上人は、『往生礼讃私記』で初から上品往生せしめたまえまでを往相の願とし、かの国から終りまでを還相の願とされていて、区切って読むとわかりやすい。弟子等とは学や解が我が後に従う者をいうので、仏の教えを信ずる人びとをさす。聖

衆現前とは阿弥陀仏の浄土へ往生を願ひ念仏する者には臨終の時に阿弥陀仏や観音勢至等の諸菩薩の来迎があるのであつて、それは四十八願のうちの第十九願によるものである。上品往生とは観経等によると往生者の機根に上品から下品まで九通りあるが、そのうち上品者の往生を願ふということ、善導大師の六時礼讃の修行は、念仏の助業としてはなかなかの苦修であるから上根者の相であるという。還相まで願う者の行としては当然であらう。六神通とは極楽浄土へ往生する者が得る六種の神通力で、身如意通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通漏尽通であり、四十八願のうち第五願から第十願までにでている。

大意

私達はふだんいろいろな務めにはげんでいる。眞実の世界を考え求めることなく多忙にすぎている。しかし誰でもやがて臨終の時がやってくるであらう。その時にせまりくる邪見、恩愛、死苦等により心が顛倒したり、錯乱したり、失念することなく、身も心もなんの苦痛なく安らかに禅定に入つたように静まり、やがて阿弥陀仏や他の菩薩がたの来迎をうけて、その御力によって極楽浄土へ往生させていたただきたい。

ひとたび浄土に生れて、自由自在の神通力を得たならば、再びこの世界にかえつて、苦しみ悩み争っている人びとを救いたいと願う。この救苦衆生の願ひは虚空法界が尽きることはないように、未来永遠に尽きることがないであらう。この二つの願ひをおこし終つて、心から阿弥陀仏に帰命し、心と口に南無阿弥陀仏と念じ奉る。

願と念仏

この二つの発願は臨終および死後の願ひである。しかし死および死後の問題は死んでからでは問題にならないのである。死および死後といつても、それは生の時の問題である。古人はそれゆゑ「世業におわれて後生を忘るることなかれ。」といわれた。これはある家の先祖の墓石に刻まれた言葉である。法然上人も臨終がのびれば平生となり、平生も突然死がくれば臨終となり、平生臨終区別なしといわれ、平生の念仏相続をすすめられている。念仏とは念々に仏の名をとることをいふことである。善導大師はこの発願文において、往相と還相の二つの願ひをおこすことをすすめられた。そして至心に阿弥陀仏に帰命して念仏申しつつ生活して行くことが、私達の願ひらしい眞の生活であると思うのである。

祐天上人安産の名号

祐天上人在世のことであるが、江戸のある旗本の武士の一人娘が、非常な難産で産気づいてから、三日三晩苦しみ通したが生まれないう。そこで種々の祈禱や呪術をおこなったが、なんのききめもない。そこへ、ある人が、父親の武士のところへ来て

「近頃、祐天上人という名僧がいて、そのお名号を貰って飲ませるといかなる大病も、不思議に全快すると聞くが、貴殿も、祐天上人にお名号を書いていただいたらどうですか」

とすすめた。父親の武士は、早速、祐天上人に懇願した。すると、上人は直ちに承諾されて、小僧をよび、俎と一本の大根をとりよせた。武士はげんにおもいながらみていると、上人は

「ちよっと貴殿のお腰のものを拝見」

といわれたので、武士は大刀を上人にわたした。刀を受取った上人は、キラリと引きぬき、大根を切ろうとした。武士は驚いて、

「ちよっとお待ち下さい」

という、上人すかさず

「この刀は大根が切れぬか。」

と。武士は怒って

「その刀は自分にとってはかけがえのない大切なもの。しかも祖先伝来の銘刀である。いかに世事に疎いとはいえ、大根が切れぬとは何事か。大根は菜切庖丁で切るのがあたりまえである。この刀は、一朝事あるときより、他につかうべきものではない。」

という、上人やさしく

「まことに貴殿の申さるる通りじゃ。南無阿弥陀仏の名号も、無量億劫生死繋縛の繩を断ち切る利剣の名号であって、産婆のかわりとして、胞衣を切るぐらいに用いるべきものではない」

とさとされた。いままで怒っていた武士も、上人の生きた教訓をうけ静かにおしえを聞くのであった。祐天上人は

「この道理がおわかりならば、お名号を書

いてあげましょう。貴殿の息女がいま難産で、三日三夜の苦しみを受けるのも、又貴殿が父として息女の苦しみを眼前に見ながら救うこともできず、苦悶するのも、みな業によるのである。

自分の無始以来の業障を至心に懺悔し、唯一声でさえ無量億劫生死の罪を滅する阿弥陀如来のご本願のお名号を唱えて往生を願わねばならない。

さすれば、かならず如来の威神光明はあまねくわれらを照したまい、求めずとも悪障おのずから去り、罪障滅して無間地獄の苦しみさえも除かれるのである。難産の苦痛もたちまちに消え去ることであらう」

と諄々とかれたのである。そのおしえ通り往生極楽のための南無阿弥陀仏を、家内中声をあわせて申したところ、難産の娘の苦しみがれて、安産したということである。

「母」

平井 宥慶

(東京文京区春日在住)

母は明治四十二年生れだから、今年でもう六十の峠を越えたわけだが、他人から歳よりも若くみられることが多いのは、多少はお世辞もあるのだろうが、父の死後一人で寺をきりまわしてきた気持の張りがそうさせているようにも思える。父の死は、戦後の復興のきざしがみえはじめたもののまだ戦災の痛手がかしこの残っていた、昭和二十四年の春まだ浅い三月であった。わたくしはまだ小学校にも入らない頃で、死というものがどのようなものかまださだかにはわからなかったであろう、急に周囲が賑わしくなり、何人もの人が立ち騒ぐなかで、父の声がなにもきかれなくなってしまった事実、死というものの何たるかをおぼろげに感じはじめていたように思われる。

一体に、死はお釈迦さま以来、生老病死の四苦の一つとして、人々をさまざまな感慨にみちびいてきたものだが、わたくしにとって、父の死はそうに未熟な幼いうちの経験であったから、その当時格別どのような感情をもったか、今にいたってはさだかには思い出すことはできない。父がおらず、しかもわたくしは兄弟のいない、いわゆるひとりっ子であったので、寂しいでしようとはよくたずねられたものだが、わたくしにとってはそういう状態そのものが、ほとんどわたくしの物心ついた頃からの習慣であり、とりたてて寂しいとかという思いをしたおぼえはなかった。戦争でわたくしの生れた寺の本堂も庫裡もすべて灰塵にきしてしまった。しかも父は死に、残された母はまだ幼いわたくしと父の師僧にあたる老僧をかかえ、寺の復興という大事業に立ち向ったわけである。信仰で結びつく寺とお檀家にとって、その拠点となるべき本堂はその象徴であり、安易な考えでは復興もままなら

ないことはいうまでもない。まして戦災はわたくしの寺ばかりでなくお檀家のほとんどをその渦の中にまきこみ、その中から復興の力をいかに生みだすかというところに困難な事情があったわけである。ところで、このように戦後の復興を女手一つでなさねばならない悲壮感の中にいつもあったように思われるかもしれないが、しかしわたくしは幼なかつたせいであろうか、日常の母からそれを感じられなかった。母は何ごとにつけても厳しい質で、わたくしなど激しく叱られたおぼえもあるように、感情をはっきりとおもてに出す性質なので、母がことさらわたくしにみせないようにしていたとも思われない。復興にふりむけることのできる財産の余裕を一つとしてもたない当寺の再建は、お檀家との結びつきのみにかかっているといつて過言でなく、苦労はなみなみならぬものであったろうが、だからといって母は日常の生活を乱す派手な気負いは持ちあわせていないのだろう。母はほとんどのお檀家のプライベートな家庭状況までつぶさにおぼえており、一度みた人は何年たつても忘れないうのにはおどろかされる。昭和三十四年の春のお彼岸が明けた日、父に譲るまで長い間当寺の住職をつとめた老僧が八十六歳の高令を全うして他界した。老僧はわたくしたちの肉親ではない。生涯を独身で過ごし、社交的なつきあいから遠ざかり仏につかえてきた老僧の死は、まことに静かであったことが思い出される。

本堂の再建がなつたのは、東京オリンピックに日本中が沸いていた昭和三十九年の秋であった。終戦直後、ともかくも住むところと木造の小さな二階屋を造られたことから始まり、父の死に前後して仮の本堂とわずかな庫裡を建て、若い所化さんをおくのに手狭になつたので増築し、その他聖天堂の建立、納骨堂の改装など、ほとんど母一人できりまわしてきた。本堂の再建は、母にとっていかなる思いであつたろうか。今の日常的な母からは殊更の感慨はきかない。

母は多摩川沿いの登戸に近い農家の出で、縁あつて寺に嫁ぎ、若い頃からさまざまの苦勞にあいな

から今日にいたったことをみると、運命的な不思議さが感じられてしかたがない。母がまだ若い頃、実家の父親に苦勞話をこぼすと、昔かたぎの父親は、嫁いだのは仏さまにつかえるためと思ってがんばれとさとされたという思い出話をきいたこともある。それを極めて日常的に話すような母である。昨年の春から初夏にかけて庫裡を新築したが、やはり母に主導権がなかったら完成しなかったろう。その母も近年めっきり皺がめだってきた。風邪一つひかぬ丈夫な母だが今年の一月末胃痛をうったえ、精密検査の末に胆嚢炎とわかって入院し手術した。胆嚢は親指大のやら小豆大など大小の胆石でうまり、ほとんどその機能を果さない状態になっていたが、その茶色い石をみたとき、母のこれまでの苦勞の結晶をみた思いに強く心をうたれたのを思い出す。そして母の病いが癒え、春のお彼岸も無事にすましたこの五月、わたくしは結婚をした。母にとっては嫁をむかえたことになったわけである。

戦後、わが国には戦前にはなかったような類の多くの社会的問題が起ってきているが、その一つにいわゆる嫁と姑の問題があろう。それは基本的には人間観の変遷をふまえた上で、人と人との関係として論ぜられるべきものなのだろうが、嫁と姑の関係の場合は、わが国においては本来的に一軒の家に同じ生活を営むような人間関係の密接さの中で、極めて感情的な触れ合いが生ずるところに、さまざまな問題がうきぼりにされてきている。だから、単に別居すれば解決するというような、簡単な問題でなくなっているのが現状ではあるまいか。

結婚のことを母に話したとき、母に「おまえはその娘を幸福にする自信があるか」ときつくだされた。わたくしはこの一言に重い責任感と、そして母のわたくしに対する深い慈愛の念を感じ、これからきりひらくべきよりよき未来への予感にふるえながら新たな人生の出発台に立った。

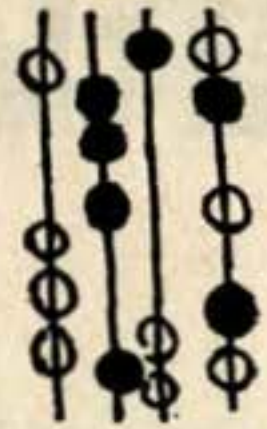
夫妻という人間関係のよりどころは愛だといわれる。その愛とはいったいどのようなものなのか。



作家の井上靖は愛は執着だという意味のことをいっているが、これには多くの受けとり方がりそう
だ。執着を字義通りにとれば仏教的にいつて、迷いの根本たる無明と不離のものであり、これある限
り凡夫は迷界に苦しむことになる。まさにこれは渴愛として排斥されなくてはならないものだが、か
くならば世間では愛が基本的感情の一つである以上、世間のほとんどの人々は仏教に帰依しても無駄
なことになってしまう。このような理解でよいものだろうか。よく考えてみると、一組の夫妻という
人間関係をとってみるとき、それはそれだけでは決して存在していない。必ず親がいて、子供がい
て、あるいは兄弟がいて、彼らの住む社会があつて、その中での人と人と触れ合いがある。このよう
なさまざまな人間関係の中で、はじめて夫婦は夫婦として認められ存在するのであり、これらもろも
ろの関連性真の調和あつてこそ、夫妻という社会的単位も十全に生かされるのではないか。ともかく
縁起という考え方が、孤立して生きていくことの困難な現代で、人間関係にもっとも端的にみらるべ
きようで、このあたりの認識が近年欠けているように思えてならない。このような意味から、人と人
とを結びつける極めて強い吸引力となるものを愛という言葉で表現し、この意味から執着というのな
ら、仏教的な融和の精神に適うことになる。どうも単純に執着というのは適切な表現ではないよう
だ。

わたくしたちの新たな人生の歩は、ようやくはじまったばかりで、これからさまざまな憂きこと
に会うだろう。そのとき、これまで歩んできた母の人生をふりかえることが必ずよりよき方向を指示
してくれるにちがいない。

外出をきらう母はだれにも邪魔されず昼寝をするのを楽しみにしているが、そんな静かな日常のう
ちに、次の計画を考えているようである。今年の夏の暑さは急にきたのでわれわれ若いものは身にこ
たえているが、そんな様子はみせない母である。



和来ばなし

▽ も の 忘 れ へ

長老 「さてこのほどは、久々貴僧も御上京の由、なにかめずらしいことはなかったかな」

客僧 「ことの外、めずらしいことが、ございました。」

長老 「それは、どんなことじゃ」

客僧 「十歳ばかりの子に、十念をさすけましたり、辞世の歌を読みました、めずらしい不便のことでした」

長老 「その歌はなんといわれるか」

客僧 「ああ、なんとやらしい歌でしたが、トント忘れました」

長老 「沙門が物を忘れて、悟りの道がどうなるものじや。チトおたしなみなされ。貴僧のようなものが、釈尊の弟子にもあった。」

客僧 「なんという弟子でしょうか」
長老 「うーん、なんとかいったなあ」

▽ 八 遍 念 仏 へ

あるところに、一生懸命にお念仏を申して、そのお念仏を袋に入れ、また申しては袋に入れ、また申しては袋に入れ、九つの袋に念仏を申して貯めこんだ。この人は「もはや冥土へゆくのに、土産の心配はいらないわい」とおもい、その後は、さっぱりお念仏を申さずいて、ついに命終した。

そこで、この人は、生前貯めて置いた念仏の袋を荷造らして、背負って六道の辻までやってきた。六道の辻に鬼どもがいて

「無断通行はならぬ」

ととがめられたが、この人は、土産を沢山に持っているの、意気揚々と鬼どもにかまわず通り抜けようとした。すると、また鬼どもに

「通行まかりならぬというのに聞えぬか」
と一喝された。

そこで、この人は立ちどまり

「いやとがめる必要はない。この土産は全部お念仏だぞ」と意気高にいった。すると、その中でも正直そうな鬼が

「それは結構じゃ、通りたまえ」

というと、ほかの鬼が来て

「いや、この前にも改めて通したら、閻魔大王より三日間も叱責されたことがある。めったに通してはならぬぞ」

といって、その人の荷物を検査したところ、その土産は、みんな名聞利養の念仏ばかりで、しいなばかりで、ほんものではなかった。鬼どもも驚いてこの人を通行止してしまった。

しばらくすると、そのあとに、長い羽織を着た男が、しおしおと通りぬけようとした。鬼どもは「こやつ悪人らしいな」とおもい

「土産はもたぬか」

と問うと

「いやございません」

という。

「少しぐらいあるだろう。みせねば通さぬぞ」

というと、その男は致しかたなく、小さな袋から取り出して「まことに恥しいことですが、まだ十遍までございませんが……」

といって、八遍の念仏をとり出すと、いずれも光明赫灼とかがやいていた。鬼どもはひれふく拝み礼拝して

「実に十念一念なり」

といって、極楽へ通された。

Ⅴ 真言のふしぎ

大勢が寄り集って、仏法の話のなかに、真言の信者がいて「わたくしの宗旨に降伏の法と申して、人を祈り殺し、また祈り活かすことがあります。なんと奇妙な法ではないですか」

というと、それを聞いていた一人がいうのに、

「祈り殺すことはむずかしいが、私にも祈り活かすことはできますよ」

というと、みんなが、

「それは、どういう法でしようか」

と問うた。すると

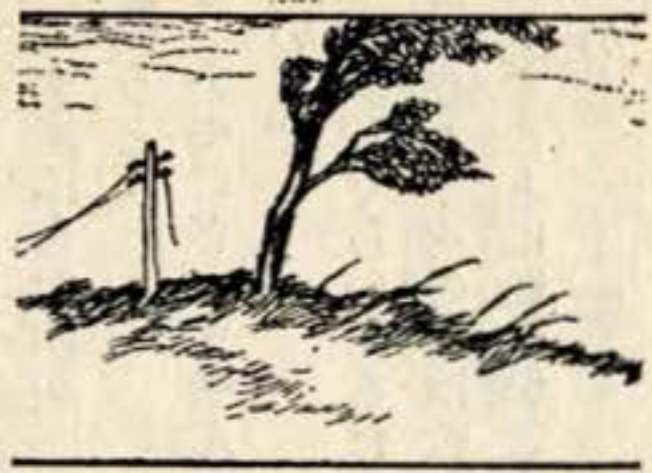
「それは……祈り殺すときの経文を、さかさに読めばよいのです。……」

悲しみをのりこえて

—子供の死に思う—

須 山 俊 夫

(横浜市港南区在住)



子供は死んでしまった。あのクリクリとした眼、あの愛嬌ある獅子鼻をもう見ることはできない。ヨチヨチ歩きで、毎朝夕送り迎えしてくれたあの子の、あの特徴ある足音をもう聞くことはできない。

ながいうつとうしい梅雨もあけ、酷暑のきざしがみえはじめた七月下旬のある早朝、次女の直美は、一年二カ月のあまりにも短い生涯を終えてしまったのです。心室欠損という不治の病にたおれたのです。心臓の一部に穴があいているため、血液の循環が思うにまかせないという難病。この病名が分ったのは死亡する二週間前のことでした。

今にして思えば、あれほどよく肥っており、元気な子供で

はあったが、時折ぐったりとすることがあったのは、この病いのためであつたのでしよう。お医者さんに診てもらつた時も、ほかの原因のみを考え、その短い生命を奪つた病いのもと、心臓の精密検査が一番最後になろうとは。けれど仕方ないことであります。

それでも、お医者さんが「このお子さんは大層丈夫そうだから、体力を整えればこの十月には手術ができるでしよう」と、いつてくれた時には、一抹の不安があるにはせよ、何か願望めいた希望をつないでおりました。

しかし、この希望も一瞬に消え、またたく間に奈落の底におとされてしまいました。

もう直実は帰らぬ人となつてしまつたのです。気が動転し、狂わんばかりに泣きわめく妻。母の泣き声に、何のことが分らず驚くかのように泣きじゃくる三つになる長女の佳子。しっかりしなければいけない、しっかりしなければ、と自分にいい聞かせる。

ひさしぶりに休みをとり、親子四人で父母の待つ福島へ行くことになつていた朝、こんなことになるうとは。父母にはここ一年あまりご無沙汰がちで、直美も出産の時以来見ていない。たのしみに孫の来るのを心待ちしている父母、その父母に直美の死を告げるのは、あまりにも残酷だ。けれど知らせなければなりません。郷里には電話がない。そこで農業協同組合に電話をし、電話をかけてくるようにと伝言する。

電話がかかってきたならば何といえいいのか、重苦しいひと時が過ぎていく、計報をきいて近所の方々がかけつけてきてくれるが、電話のことが気にかかり、応待も思うにまかせない状態でした。ふだんは一服の清涼剤となる蟬のなき声も、今は気を重くするかのように聞こえてくる。

そんな時、一層いやな音が耳をさいた。「リーン・リーン」電話が鳴り出した。受話器をできることならば取りたくないが、そうもいかない。なつかしい母の元気な声がかえってき

た。「俊夫、どうしたね。驚いたよ、電話をよこせなんて。来れなくてもなったのかね」。「ああ」。次のことばがどうしてもでてこない。「どうしたね」。母に念をおされ、いよいよ告げる時がきたと思った。「母さん、驚いてはいけないよ、気を確かにもつてこれからいうことを聞いて下さい。いいですね」。「どうしたね、改まって」。「今朝、直美が死んじゃったんだ」。「何んだって、もう一度はつきりいっておくれ、冗談いわんでおくれ」。「いや本当なんだ」。嗚咽し、ことば止絶えがちな私、そんな私に、「気を確かにしておくれ、すぐに父さんと行くからね」と、逆に母に励まされる仕末。電話では母の姿は見えない。ことばでは大層強がりをいってはいるが、多分ふるえながらいるに違いない。けれども、そんな母が父と一刻も早く来てくれることを願つたのです。

何から手をつけてよいのやら、まったく分らず戸惑う私と妻。そんな二人に気をつかうかのように、ご近所の方々によって、通夜、葬儀の準備がなされている。郷里を遠く離れ、見知らずの土地へようやく家を建てて半年、妻は日中、いろいろやりとりがあるにせよ、あまり親しくはないご近所の方々ではありますが、まったく献身的に取り進めてくださっている。この時程、遠くの親戚より近くの隣人という感をもつ

たことはありませんでした。

日中の暑さがようやく薄らいできた夕方五時前、待ちに待った父母がかけつけて来てくれた。すでに部屋には祭壇が飾られている。挨拶もそこそこに父母はその祭壇の前に平伏してしまった。まさかこんな形で無言の対面になろうとは、遺影がくもらんばかりに涙ふす母、生来無口の父は下を向いたままにいる。そんな姿を見て私も、それまでがまんしていた涙が頬をつたわるのを覚えた。

七時、通夜がはじまった。読経のひと声ひと声が心深く入りこむような気がする。眼を閉じた。すると直美の出産以後の思い出が走馬灯のように頭をかすめていく。長女の佳子に比べ難産だった直美。泣きじゃくりミルクを与えると一気に飲みほし、そしてスヤスヤ眠ってしまった直美。三カ月目、光を追うようになった直美。七カ月目、いざりのように座ったままの姿勢ではうようになった直美。十一カ月地、ハラハラする私たちを尻目に二、三步よろけるように歩きはじめた直美。そして死ぬ直前、パパ、マンマというよになった直美。その直美も、もうこの世にはいない。

通夜も終り、翌日の葬儀も滞りなく終えた。ご近所の方々、会社の同僚の見送りをうけて火葬場に向った。通いなれ

た国道までの道も、今日は何かしら、違ったところを走っているような気がする。

そして今、私の手の中にあるものは、小さな骨壺に収められた直美の遺骨。それから伝わってくるなまあたかさは、生前直美をだいた時のあたかさは違う。何の反応も示さない、つめたい異物をだいていような気がする。直美も遠い人になってしまったという実感、それとは裏腹に、かわれるものならばかわってやりたかったという気持が、複雑に交互してくる。

車は夕闇こいなかを我家に着いた。そして弔問の人びとは、「気を確かにね」「元気にな」と告げ、三々五々帰られた家の中は親子三人、それに父母の五人のみとなってしまう。はりつめていた気分が一べんにくだけ、涙がとめどなく流れてきた。家族のこともあまり分らないままに、生きるというたのしみを味わいもせず、死んでいった直美。しかし、いくら悔いてもはじまらない。この上は親子三人が精一杯生き、努力することが、今は亡き直美に対し、報いる唯一の方法でしかないのだ。早く直美が極楽の世界におもむき、やがてあたたかい手をさしのべてくれるよう、直美の霊やすらかにと、いのらずにはいられない。

道

高橋良和

鳥羽への道

念仏停止ということから、法然上人が土佐の国に配流されるということ、ここに法然上人のすすめる浄土教団に危機が迫ってきた。

然し法然上人はびくともしなかった。

「辺鄙におもむきて、田夫野人をすすめんこと本来の本意なり。」
といて、

「この法の弘通に、人はとどめむとすとも、法さらにとどまるべからず。」

という強い信念で、土佐の国に赴くことになって、いよいよ京都を発って、四国への長途の旅に出ることになった。

こうして法然上人の最初に流罪の地と決められたのは、土佐国幡多というところであったが、後に上人の老体を考えて、讃岐の地に変更されることになったので、京都の出発当時はどこまでも、土佐国ということであった。

そこで上人は、この配流が決まった当時は、吉水の庵室を出て、東山の小松殿いわゆる兼実公の邸宅におられたそうでありこの屋敷を出発されたのは、建永二年三月十六日（一二〇七）のことである。



この小松殿は、今の京都東山渋谷の小松谷正林院であり、月輪の小松殿と誦していた。この小松殿にある日、法然上人がまいられたときに、すばらしい奇瑞があったことを私日記に記している。

「ある日上人、月輪殿に参上しまふ、退出のとき、地より上高く蓮華を踏みて歩みたまふ、頭先赫奕たり、凡そ勢至菩薩の化身なり」

と、それほどこの兼実公は法然上人に帰依したので、上人が土佐の国に赴かれるその前日の夜、兼実公と上人とは、この法性寺という寺の小御堂で会談している。おそらくは再び生きてまみえることがないということ、二人で一夜を明かしたのであらうと思う。

この法性寺の小御堂は今はなく、わずかに法性寺という寺が残っているが、この寺は今の臨済宗大本山東福寺の北門の近くにある。この寺の本尊は、旧法性寺の灌頂堂の本尊であり、この外兼実公の持仏の阿弥陀像が法然上人の御影の横に安置している。

かくして一夜は明けた。

すでに七十五歳の法然上人は、京都をあとにして、御船にのって淀川に出るのである。船の乗り場は鳥羽というのであるが、昔は京都市の郊外であったが、今は京都伏見区の鳥羽である。

この配流の一行にお供するのは、信濃国の角張の成阿弥陀仏というのが、とても力が強かったとみえて、法然上人の輿をかつぐのであるが、その外に六十余人の僧が随行している。

このことについて、四十八巻伝には、法然上人は、必らず馬や車に乗って行かず、歩いていったと思うが、老令の故に今回は輿にのっていったのであらうと推測している。行列



もさることながら、沿道の見送りは相当なものであったらしい。

いづれもが合掌し、念仏の声が田野にみち溢れたということである。

当時京都から大阪へは船便がもっとも便利であつて、この鳥羽といつても、上鳥羽、下鳥羽の二つあるが、下鳥羽の方であり、昔はそこに門があつたらしい、鳥羽の南門といわれているが、今はそのかたちもない。

ただこの下鳥羽の地に、一念寺というのが今も残っている。

この一念寺は、寺伝によると、奈良時代のはじめ道昭の開創であるが、真阿が室町時代に念仏の道場として再建したらしく、更に奈良東大寺念仏堂より丈六の阿弥陀像を本尊に迎えて、鳥羽の大仏として知られていたといわれる。

この下鳥羽の地から法然上人は乗船するのであるが、この地には草津の乗船場があつたらしい。

今は乗船場などあとかたもなく、昔ここから船に乗ったなどというところ、子供でもこくびをかしげるだろうと思う。

然しこの一念寺には、かつて船のともずなをつないだという船繋ぎ石があり、また最後に熊谷蓮生にあたえられたという、名号などが寺宝として残っている。

再びみることの出来ない京の町であつたらしい、なだらかな東山の山脈をながめた法然上人の感懷は、どうであつたであらうか。

おそらくこの上人を見送る人々の念仏の声が渦のようになって、ひびいたと思うのであるが、昔なつかしいこの地もすっかり宅地造成がすすんで、田圃も少なくなつてしまったのが淋しい。

△宝物シリーズ▽

六根清浄／＼まだ朝暗い山道に朝露をうけ、老若男女が草^わ鞆^じばきに杖をもち白装束に身を纏い、汗を拭きふき標高一二四五メートルの山頂にある阿夫利神社へと歩を運んでいく。七、八十歳のお年寄とは思えない程の元気な姿である。夏とはいえ冷える。しかし朝もやの中より日の出を拝する光景はなんとも心が洗われる思いである。

小田急線新宿より急行で約一時間、伊勢原駅を下車、バスに乗換え二十分で大山の麓に着く。

大山寺は天平勝宝年間に奈良東大寺の良弁僧正が大山頂上に大伽藍を建立し石尊大権現、不動明王を勧請し、雨降山大山寺と号し、朝廷より相模、安房、上総の租税を寺領として賜わり東国鎮護の総祈願所となったといわれている。

その後、文永年間に鎌倉大楽寺の願行上人が不動明王の大尊像を造立して安置した。これが守り本尊で現在の不動尊である。

大山は華嚴・真言・天台の三宗の道場でもあった。しかし、庶民には教理は難解なため護摩の修法のみが大衆に受け入れられるようになった。その修法は知恵の火で煩惱の薪を焼き真理の性火で魔の害をなくすことを不動本尊に祈願することを意味するのである。

早拔といえは大山・飢饉といえは大山・豊年、豊漁といえは大山というように庶民の心に深く密着していった。特に江戸期に入ると江戸・藤沢・小田原の近在はいうまでもなく東国地方に多くの講中が生まれ、夏季ともなると参詣するものが行列をつくる程であった。彼らは豊作・豊漁、あるいは家内安全・商売繁昌の願を胸に托して大山不動尊に祈願するのである。関東における山岳信仰の代表的なものといえる。

ところが明治維新の際、神仏分離によって寺領を失い、石尊大権現は阿夫利神社と改称し、不動尊は頂上より中腹の大山寺に遷座した。開山良弁僧正の信念は神仏分離にはなく神仏共存の靈山として開創であったであろう。だが参詣者は無関係である。今も神仏分離されたとはいえ昔からの根強い信仰は人の心まで分離変革はさせなかったようである。

(佐々木洋之)



相模大山不動尊

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年八月二十五日印刷

昭和四十五年九月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和四十五年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十五年九月一日発行

浄土

第三十六卷

第九号

定価金九十円 (送料六円)

日本仏教の成果 浄土教のあけぼの

覆刊のあいさつ

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局長 小林 大 巖
浄土宗宗務総長

「浄土宗全書」正統両篇全巻の覆刻頒行発願以来二十余年、三四師友の契勸を忝うするも、該の資金面に困苦を覚ゆ。関連の近親宗派や、其他に援助を要めようにも、容易にその意をえず、仏祖の慰護と有縁の扶翼を念じつつ、浄土宗開宗八百年を目睫に迎え、焦心しきり願意の暢達をして止まず。折から昨晚秋、有限会社山喜房仏書林代表取締役青木正雄氏から、師友を介して、該全書全巻の覆刻刊行に必須の財的法的などの一切責任荷負をはじめ、関連諸般の悉皆責務を社をあげて負担に当り、浄土宗や一般人士や社会に対しては、商賈営利を度外視して仏教精神の伝弘に立脚し、念仏信行の策勉奉仕に、赤誠一貫の確約で、覆刻発行に挺身従事の切望申請と、同願師友の激得に依恃し、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局の出版事業の一として、内外大方の覆刻刊行要請に応えるべく、初巻配本を、法然上人聖誕日の四月七日と定めて宿志の具現に、山喜房仏書林の切願を聴諾したのである。この覆刻刊行に際し、師友を煩して、底本の由来や校正の頗末解説や爾来の研考様子の等々を、その責任分担で附すを念いしも先ず覆行をと急ぎ、夫等是他日を期した事情を諒察されたい。

いささか覆刻刊行の来由を略述して、念仏教学の師範人生行路の指標、教化振作の洪軌と仰ぎつつ、先聖の慈悲に報告して、信解行証の策勉を希念してたえない。

浄土宗全書

正 統
四十二卷

- ・ 予約申込規定 全四十二巻予約申込のみに限り出版します。
- ・ 定 価 各 巻 2.000円
- ・ 刊 行 期 日 昭和45年4月7日第一回第一巻発行 / 御申込みは下記発売所又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。 / 内容見本進呈

発 行 所 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

発 売 所 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4 東大赤門前
TEL03-118-5361 振替東京1900